



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学  
Hokkaido Information University



30<sup>th</sup>  
Anniversary

2018年  
12月発行  
通巻 第23号

# FD・SDニューズレター

Hokkaido  
Informant  
Univer

## 巻頭言

FD委員長 山北 隆典

### はじめ

「FD・SDニューズレター」が初めて世に出たのは平成21（2009）年6月のことでした。当時は「教育GPニューズレター」という名称でした。なぜ「教育GP」なのでしょう。教育GPとは文部科学省が平成20年度に実施した教育改革プログラムのことで、「大学設置基準等の改正等への積極的な対応を前提に、各大学・短期大学・高等専門学校から申請された、教育の質の向上につながる教育取組の中から特に優れたものを選定し、広く社会に情報提供するとともに、重点的な財政支援を行うことにより、我が国全体としての高等教育の質保証、国際競争力の強化に資することを目的（文部科学省のWebページより）」とした「質の高い大学教育推進プログラム」のことです。このプログラムに対し、本学からはFD委員会初代委員長を務められた富士隆先生（前学長）のリーダーシップのもと、「ICTによる自律的FD推進モデルの構築」を申請し、選定されました。この取り組みは、授業改善のためのPDCAサイクルを半自動化する自律的FD推進モデルを構築し、教員が活用できるFD支援システムCANVAS（Creative Activity for Nurturing Value-Added Students by using a Faculty Development support system, 付加価値の付いた学生を大切に育てるための創造的な活動）として実を結びまし

た（図1、図2）。このように、本学のFD活動は教育GPへの取り組みとしてスタートしました。この成果を広く社会に情報提供するために「教育GPニューズレター」が発行されたのです。「教育GPニューズレター」Vol.1の巻頭言には当時の本学学長であった長谷川淳先生が「FD活動に期待すること」として、FD活動と教育GPへの取り組みとの関連の深さについて述べられています。

その後、プロジェクトの終了とともに、「FDニューズレター」と改称され、平成28（2016）年10月発行のVol.19から、SD（Staff Development）活動の報告も包含することとし、「FD・SDニューズレター」と名称変更し、今日に至っています。

### 教育GPからの10年間

本学のFD委員会は「教育GPニューズレター」創刊の前年、平成20（2008）年に発足しています。初代委員長の富士隆先生は、本学のFD活動を単なる教員の能力開発だけではなく、カリキュラムをはじめとする教育モデルやFD活動を支える学内外の組織も刷新していくという「教育イノベーション」と捉えて取り組みました。CANVASを中心に、CANVASという名称に込められた想いを胸に、全教職員が力を合わせ、今日まで走り続けてきた10年間だったといえるでしょう。

当初は「教育イノベーション」を達成するための主要なミッションに対応して、FD委員会のもとに9つのWG（ワーキンググループ）を設置し、授業評

## 目次

1. 巻頭言	1
2. 「多様な学生の満足度向上に向けたカリキュラム改正について」学科等の取り組み	
・先端経営学科の取り組み	3
・システム情報学科の取り組み	4
・医療情報学科の取り組み	4
・情報メディア学科の取り組み	5
・共通教育の取り組み	6
3. CDIO2018 参加報告	7
4. CDIO Academy に参加して	10
5. enPiT 参加報告	11
6. SD 研修会開催報告	15
7. FD・SD 関連行事および活動実績	16
8. 編集後記	16

価アンケート、ピアレビュー、GPAとコンピテンシーの導入、ICTの活用推進、チュータ制度、Own Teacher制度、カリキュラム・ディベロップメントなどへの取り組みから始めました。その後、WGの増減や小委員会等の新設など、体制のマイナーチェンジが行われてきました。

進めてきた活動内容のひとつにイベントの開催があります。それぞれのWGが主体になった研修会や報告会を頻繁に実施してきました。例えば、外部の有識者の方々にカリキュラムについてのアドバイスをいただく「カリキュラム・アドバイザリーボード会議」はこれまで12回開催しており、本学のカリキュラム開発に大きく寄与してきました。また、毎年3月には、年度末の総括を行うフォーラム（昨年度から、SD活動も含め、「FD・SDフォーラム」に名称変更）も実施してきました。

### 新たなステップへ

こうして本学全教職員の努力と関係各位のご協力によってFD活動の基盤が整い、FD活動の中にも一定の成果が得られ、定常的に運用できるようになったミッションや、引き続き推進すべきミッ

ション、そして新たに取り組むべき課題が見えてきています。そこで、10年の経過を機会に、本学のFD活動も仕切り直しを行い、これまでの活動の継続性と新たな取り組みを始めるきっかけとなるよう、体制の見直しがなされました。大きな変更は、これまでのWG等を3つの小委員会に集約（図3）し、それぞれの活動領域においてFD活動の推進、調査・検討、実施を進めることにした点です。これまでの活動が終了するのではなく、必要なものは継続し、そのうえで今の時代、本学の置かれた状況に即した新たな取り組みに挑戦していきたいと考えているところです。主体的学びの促進やCDIOイニシアチブへの加盟（FD・SDニューズレターVol.22参照）、PBL（Problem-based Learning：課題解決型学習）の推進、enPiT (<http://www.enpit.jp/>参照）への参加など、新たなステップでの成果が期待されています。

### おわりに

今年の日本は、各地で大きな災害に見舞われました。6月の「大阪府北部地震」、7月の猛暑や「平成30年7月豪雨」、9月の台風21号、

そして北海道では、台風に襲われた翌日、9月6日3時7分59.3秒に、胆振地方中東部を震源と地震が発生しました。「平成30年北海道胆振東部地震」です。最大震度は、震度階級で最も高い震度7を記録し、厚真町では広い範囲で大規模な土砂崩れに見舞われ、札幌市では液化化現象が発生するなどの被害を受けました。被害に遭われた方々へ、謹んでお見舞い申し上げます。

この地震に伴い、道内全域約295万戸で停電（ブラックアウト）が発生し、道民の生活に大きな影響を与えました。サッカーの国際マッチ、プロ野球、プロゴルフ、日本マスターズスポーツ大会、自転車ロードレースなど多くのイベントが中止や延期になりました。本学で開催を計画していた「カリキュラム・アドバイザリーボード会議」もこの地震の影響で中止せざるを得ませんでした。開催に向けてご準備いただいたアドバイザーの先生方をはじめ、関係者の皆様にはこの場を借りましてお詫び申し上げます。なお、当日、本学から報告予定であった内容につきましては、本ニューズレター内で報告しておりますので、ご確認いただければ幸いです。



図1 CANVASのトップページ



図2 CANVASのダッシュボード

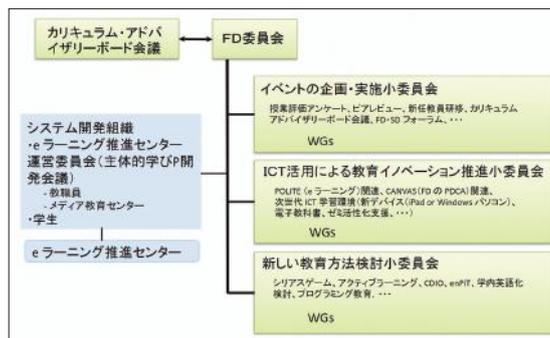


図3 FD委員会の推進体制

# 「多様な学生の満足度向上に向けたカリキュラム改正について」 学科等の取り組み 先端経営学科の取り組み

経営情報学部 先端経営学科  
学科長 明神 知

## 1. カリキュラム改正に向けた基本方針

6月に報告した単位取得、卒業率の改善のための先端経営学科の基本方針は以下の通りであった。

- ・出席率の問題には個別の対応が原則であるが、通教科目による履修も検討したい
- ・学習意欲の維持のために配当年次の見直しを行う
- ・外国人留学生の日本語能力向上を行う

## 2. 現時点での中間報告

### 2.1 通教科目の履修について

通信教育部インターネットメディア授業を通学学生に開放することにより、修得単位数の少ない学生への対策とする。

通学科目と同じ内容を通信教育で開講しているものについては、通学で取得できなかった学生への再履修など履修機会を増やすべく運営法を検討している。

また、先端経営学科の基幹科目であり必修科目である「経営学への招待」「ならびに「流通の仕組み」に関しては、通信教育科目に振替可能なメディアコンテンツが開講されていないため、通信教育部カリキュラム検討小委員会に、これらの科目に対応したメディアコンテンツの開講を、先端経営学科として申し入れをしている。

### 2.2 専門科目の年次配当の見直し

入学時には多くの学生が、当学科のカリキュラムに魅力を感じ、またそれを修得したいと考えているが、1、2年時カリキュラムには基礎的な専門科目を配置しているだけで、期待している分野が履修できない状態になっている。

そのため当初のモチベーションを維持する目的で、基礎的な専門科目の他、ゼミナールやプロジェクト学習が必要となる科目を1年次、2年次に配置することにした。具体的にはビジネスプランの検討に必要なアントレプレナーシップ論、調査方法について説明するマーケティングリサーチなどである。またデジタルビジネスを理解するための基礎となる情報社会論も1年次に配当する。同様に2年次科目にも3、4年次配当科目を2年次へと変更した。

具体的には以下のように変更することとしている。

マネジメントサイエンス	3・4年次	→	2年次
コンピュータ会計	3・4年次	→	2年次
情報システム特別講義	3・4年次	→	2年次
情報社会論	3・4年次	→	1年次
アントレプレナーシップ論	2年次	→	1年次

マーケティングリサーチ 2年次 → 1年次

## 2.3 外国人留学生の日本語能力向上

先端経営全学年で1割を占める、中国人留学生の問題が顕在化している。入試の段階で日本語能力が低いにも関わらず、合格させて聴講生や1、2年次での日本語教育に期待してゼミ配属を行っているが、期待ほどの日本語力が向上していない。

ゼミ配属して卒論を書き、日本で就職するにはN1レベルが必要であるが、N1合格者は1、2名に過ぎない。これは専門教育、共通教育、入試のあり方にまで及ぶ問題である。日本語教育担当や留学生支援課など関連部署との話し合いを持ち以下の対策を検討しているところである。

- ・入学、編入前の日本語レベル

大連東軟信息学院の3年次編入ではN2レベル、南京の日本語学院からの1年次入学ではN3レベルの取得を中国側に要請し、基本的な合意を得ている。

- ・本学への編入、入学後

専門教育配属時にN1相当レベルが望ましく、1年目で編入学生はN1へ、1年次入学者はN2へとランクアップさせる教育をお願いできないか、8月に関係者との話し合いを持った。今後も継続的に情報交換を行う予定。

・日本語教育だけでなく、日本語会話の環境づくりとして日本語カフェやホームステイ、生活面での指導の充実をはかるべく、その可能性を探っている。

・日本語PCの操作、日本語入力、Officeの操作などの学習も必要

・大学院についても入学時には原則N1を条件として、N2の場合は入学後速やかにN1にさせる方策について検討する。

## 2.4 その他項目

### (1) 浮きこぼれ学生対応

優秀な学生に対しては、1年次学生の研究室訪問から専門教員との接触を増やし、イノベーションセンターの紹介、国際コラボレーション、ビジネスプレゼンコンテスト、3年生向けenPiT、CDIOアカデミーへの参加など、実践的なプロジェクト、国際的な活動や外部活動への積極的な参加を促している。

一部の学生に集中することや、単位外活動であることなどの課題もあるが、来年度からの学科横断プロジェクト科目への取り込みなど継続して検討していく。

### (2) 卒業論文の負担

取得単位数が少ない4年次学生には負担となっている。極度のストレスになる精神的に弱く、感情の起伏の激しい学生もいる。卒論の選択化が考えられるが、今後の検討としたい。卒論指導では時間外指導の常態化から単位数増も考えられる。

## システム情報学科の取り組み

経営情報学部 システム情報学科  
学科長 内山 俊郎

### 1. カリキュラム改正の基本方針

今回のカリキュラム改正では、多様な学生の満足度を向上させるため、緊急性および重要性が高いことに限定して取り組みます。すなわち、科目の増減は原則行わず、指導体制（例：複数クラス展開）やシラバスの見直しを行うこととします。

多様な学生の満足度を向上させるためには、理解力の高い学生を伸ばし、理解力が十分でない学生にも、重要な学習項目を理解させることが必要だと考えます。ただし、昨今の状況を考慮し、1, 2年次の段階で落ちこぼれている学生が少なくなく、「落ちこぼれ対策を優先」することとしました。

シラバスの見直しについては、CDIOを参考にし、Integrated curriculumの実現と、複数科目の連携によるLearning outcomeの明文化を行います。これらに基づき、シラバスを見直す予定です。

### 2. 現状の問題点と目標の設定

落ちこぼれについて調査を行ったところ、1, 2年次必須科目で不可を取る学生が多いことがわかりました。入学まもない段階で、不可（特に複数の必須科目について）をとると学習意欲が低下する可能性があります。そこで、「1, 2年次の必須科目の不可率を低減する」という目標を設定しました。

### 3. 具体的な改善策

最初に着手する対象として、1年次のプログラミング科目を選びました。2018年度の指導体制は、習熟度とは関係なく2クラスに分けて指導するというものです。昨年度までの単位取得状況を見ると、不可をとる学生が多いといえます。その一方で、優秀

な学生は浮きこぼれていると思われます。

そこで、2019年度からは習熟度別の4クラスに分けて指導することを検討し、学科で合意に至りました。また、当学科のカリキュラム検討委員会では、検討を進めて現段階の案を作成しました（下記がその1部）。

- ・最初は全学生を同じく指導し、2週間後、習熟度別にクラス分けを行う
- ・教科書と科目試験（下位のクラスが受けられる内容）は共通とする
- ・加点課題などを設けて、優秀な学生のモチベーションを維持する

### 4. シラバスの見直し案

CDIOと関連したLearning outcomeについては、検討を始めた段階です。現段階で検討している案は下記になります。

- ・基本情報技術者試験に合格する
- ・データベース連携をとまなうWebアプリケーションを設計・実装できる
- ・AI（人工知能）の利用技術を知り、問題解決に適用できる

### 5. まとめと今後

システム情報学科では、多様な学生の満足度向上のためのカリキュラム改正として、落ちこぼれ対策に優先して取り組むこととし、「1, 2年次の必須科目の不可率低減」という目標を立てました。この目標を達成するために、「理解力が十分でない学生にも、重要な学習項目を理解させ、可が取れるように指導する」という考えです。プログラミング科目について着手しましたが、他の必須科目についても順次対応する予定です。

---

## 医療情報学科の取り組み

医療情報学部 医療情報学科  
学科長 高橋 文

### 1. はじめに

医療情報学科は、医療事務、診療情報管理、医療情報技術、食を中心とした健康科学などを主体とする診療情報管理専攻と、臨床工学技士養成を主体とする臨床工学専攻の2専攻があります。診療情報管理専攻には診療情報管理コースと健康情報科学コースが設けられ、入学時にはコース別クラス編成はと

らず、一律の教育体制にて科目修得を行い、その後コースごとに専門教育へ進んでいきます。診療情報管理コースでは、医療事務、診療情報、医学的知識をはじめとする専門カリキュラム、健康情報科学コースでは、栄養学、食品化学、分子生物学などの独自の専門カリキュラムとともに、バイオインフォマティクス分野の実習による実践教育なども組みこんでいます。一方、臨床工学専攻臨床工学技士コースは国家資格合格のための専門科目を中心に、医療情報技術の修得、コミュニケーション能力向上を含み、入学時より卒業まで一律に行います。

また、2専攻いずれも本学の特徴であるIT技術に

関する科目にも重点をおいています。

## 2. 改正に向けた専門科目における基本方針

### 1) 診療情報管理専攻

より専門性の充実を目的としたカリキュラム改正の基本方針と検討事項を以下に示します。i) 「医療事務」および「医療情報技術」の修得を目的とする病院事務分野および、ii) 医学・健康・食・情報についての知識および技術の習得を目的とする健康情報科学分野において、全学生が確実に知識を習得できるカリキュラム作りを行います。そのためには、1年次より専門課程の教育を順次行う新たな取り組みを計画します。具体的には、①1年前期「医療事務総論」、1年後期期「診療報酬請求事務論」、2年前期「診療報酬請求事務論演習」と継続して履修できるように再編成し、学生の知識・技術の確実な定着を強化します。②健康情報科学コースの高位の資格である健康食品管理士試験を希望する学生に対して、試験勉強の負担につながっている現状を鑑み、試験対象科目の開講時期を変更します。③「医療安全」については、診療情報管理専攻および臨床工学専攻の学生を同じクラスで教育していますが、各専攻学生に求められる知識が異なるため、各々の専攻目標に合致するように、2クラスに分け効果的な教育を行います。

iii) 情報処理技術の科目では、4学期制導入により重複する講義が多く、履修が困難な状況にあります。④医療現場でのIT化への変化は大きく、データベース、ネットワーク技術やセキュリティに関する知識は必須で、プログラミングに興味ある学生に対

しては、隔年で科目開講し、履修可能な仕組みを構築し、学生に履修の機会を与えます。

また、学力に余裕のある学生を対象とした指導として、⑤現在、学会の学生セッションへの演題発表および学会参加を勧めており、今後も継続していきます。⑥学生の卒業テーマの希望によってはゼミ教員から、他の専門教員への「ゼミ留学」を認めています。さらに、⑦enPit（成長分野を支える情報技術人材の育成拠点の形成）への参加の推奨や、⑧より高いレベルにある資格として診療報酬請求事務能力認定試験や基本情報技術者試験の取得を目指す教育を行うための資格支援対策の強化・充実を図ります。

以上、学生の目標に対するモチベーションを維持することに強く意識しています。

### 2) 臨床工学専攻

臨床工学専攻は、臨床工学技士の育成が主目的であることより、国家試験合格が目標です。臨床工学専攻の卒業生は、ほぼ全員が国家試験を受験すると考えられます。しかし一方では、国家試験を希望しない学生に単位取得の幅を広げる必要があるため卒業に必要な所定単位修得の見直し、一部の専門科目や臨床実習を必須科目から選択科目への変更などを検討しています。

## 3. 結語

種々の対策や取り組みに加え、学生の満足度向上において重要なことは、各教員の熱意をいかに学生に伝えるかではないかと考えます。

---

## 情報メディア学科の取り組み

情報メディア学部 情報メディア学科  
学科長 向田 茂

### 1. はじめに

ここ数年、学生たちの多様化がますます顕著になってきたように感じます。基礎学力をはじめ、興味、集中力、モチベーション、行動などさまざまな面において多様化してきています。ここでの多様化とは、学生のタイプや特徴（特性）の幅が広がったのではなく、パフォーマンスの低い学生の割合が増え、学生の特徴のばらつきが大きくなったと捉えています。

そういった中で、有意義で満足な学生生活を送るとともに、社会で活躍できる人材として成長させるためには、カリキュラムの充実は重要なテーマとなります。本稿では、情報メディア学科のカリキュラ

ム充実への取り組みを紹介します。

### 2. 基礎学力の重要性

私達は人生の中で、何かを達成したり、失敗したりを繰り返します。うまくできたときには、達成感とともに満足感を得られることでしょうか。大学生活の中心である「学び」の中で、満足感を得られるのはどのような場面でしょうか。プロジェクトが成功したとき、課題ができたとき、授業が理解できたときではないでしょうか。

一方で、授業の合格率がしばしば問題となります。合格率の低い科目は何が問題なのでしょうか。授業の難易度や進行方法もあるでしょう。その他に、学生が授業内容をそもそも理解出来ないケースも少なくないと感じます。それは、計算や文章読解力、英単語の語彙力などの基礎学力に関係します。

情報メディア学科では、短い間隔（日単位）での

繰り返し学習が基礎学力の向上には有効と考え、ゲーム感覚で取り組めるドリルアプリを開発しました(図1)。2017年度より、1年生全員が受講する科目(初修情報メディア学Ⅰ・Ⅱ、情報メディアパスポート)内で、週2回各15分程度取り組んでいます。



図1. 基礎学力向上のためのドリルアプリ  
: 初修チャレンジ

### 3. モチベーション

基礎学力が専門知識の修得に必要であると同時に、モチベーション(学びたい気持ち)が重要です。モチベーションが下がると、授業が楽しくなくなります。その結果、課題に取り組まなくなり、最終的には授業に出席することをやめてしまいます。このような負の連鎖ではなく、授業に出席したくな

る正の連鎖へと導くにはどうすればよいのでしょうか。

誰しも大学入学時は期待に胸を膨らませ、高いモチベーションで大学生活を始めます。しかし、時間とともにモチベーションは下がるでしょう。このモチベーションの下降の程度を抑えたいと考えています。

たとえば、情報メディア学科での学びから、どういったスキルや経験を得られるのかを新入生にわかりやすく伝え、意識させることが重要であると考えています。具体的な取り組みとして、専門の知識・技術と基礎学力の関係を、複数の教員がそれぞれの専門分野の立場から講演をしたり、先輩の活動(報告会)を見学する授業などを実施しています。これは、将来の自分をイメージさせ、モチベーションの維持・上昇につながることを期待したものです。

### 4. 現行(2017年度)カリキュラムの特徴

情報メディア学科では、2017年度にカリキュラムを大きく変更しました。プロジェクト系科目を充実させ、上位層の学生は積極的にプロジェクトに関われるようにしました。一方で、下位層の学生で、プロジェクトへの関わりが難しい場合には、基礎スキル系の科目の修得のみで単位を充足できるようにしています。

## 共通教育の取り組み

教養部長 蔵本 信比古

### ◎昨年度のカリキュラム改正

共通教育部門では、昨年度にH31年度カリキュラムの改正検討を行い、学生の負担軽減のため卒業必要単位の削減を行いました(現行46単位→36単位)。同時に、共通教育部門と専門課程のいずれにおいても取得できる卒業必要単位枠(10単位)を設定しました。これにより、学生の多様なニーズに応えられる、より柔軟なカリキュラム体系としました。

### ◎今後のカリキュラム改正の検討課題

共通教育では、昨年度にカリキュラム改正を行ったことから、本年度はカリキュラム改正を行わないことにしました。今後のカリキュラム改正における

課題とされたものに、以下の事項があげられます。

1. 学生の多様なニーズに応えるため、第二外国語の言語増の可能性について検討が必要です(現行ドイツ語、中国語→ロシア語、韓国語、タイ語を追加)。さらに、言語のみならず、その社会文化的背景の理解を深めるための科目新設の可能性についても検討します。
2. 学生の興味関心の移行に対応できるよう、共通教育教員の専門分野を生かしたゼミ新設の可能性について検討が必要です(「教養課題研究」)。同時に、「教養課題研究」での学習が十分に行えるよう、専門課程での卒業必要単位の一部を共通教育単位で振り替えることができるシステム変更の可能性についても検討が必要です。これにより、興味関心の移行による退学等の防止につながるものと考えています。

## CDIO2018参加報告

医療情報学部 医療情報学科 准教授 清水 芳行

### 1. はじめに

2018年6月28日から7月2日の期間、金沢工業大学で開催された第14回CDIO国際会議に参加させていただきました。本学からは、教員5名とアカデミーに応募した2名の学生が参加しました。

CDIOとは、Conceive（着想する）、Design（設計する）、Implement（実行する）、Operate（操作・運用する）の略で、工学教育の改革を目的として開発されたフレームワークです。

私とCDIOとの関わりは、2017年9月に開催された本学CDIOワークショップにおいて臨床工学教育での事例報告をさせていただいたことに始まります。情報メディア学部 隼田尚彦先生に「臨床工学実習室での医療機器を使用した実習は、CDIOのIO（実行し、運用する）の部分に対応する」との示唆を頂き、それ以来、臨床工学教育におけるCDIOの適用について考えてきました。

今回、この国際会議で「The Application of CDIO Standards to Clinical Engineering Education」と題した報告をする機会を与えていただき、半年ほど前からサイモン・ソーラ先生や隼田先生にご指導いただきながら準備を進めてきました。

CDIOの基礎的な概念や手法を学ぶことで、本学の臨床工学教育、特に学内実習の質の向上に貢献すること、また、本年3月にCDIO Initiativeに加盟した本学の中で、将来的にはCDIOを推進することができる人材になることを目的に、主に教育的なワークショップや他大学の実践例が提示されているセッションを選択し参加しました。

本稿では、その中で特に印象的だったものについ

て報告します。

本学からの報告は計4題で、全てポスターティザーセッションとポスターセッションでの発表でした。

先端経営学科の穴田有一先生は、「Implementing a Collaborative ICT Workshop between two Universities in Japan and Thailand」について、本学の国際コラボレーションのコアメンバーとRMUTTのコアメンバーとの連名で発表されました。

先端経営学科の明神 知先生は、「A Practical Application of Business System in enPiT2」について、本学のenPiT担当教員とはこだて未来大学の教員との連名で、情報メディア学科の隼田尚彦先生は、「The Curriculum Development to Accommodate Diverse Student Images by Incorporating CDIO Ideas」について同学科のカリキュラムWGメンバーとの連名でそれぞれ発表されました。

また、本学学生2名（情報メディア学科4年中村翔太さん、同3年田中結衣さん）が、CDIOアカデミーという学生ワークショップに参加しました。

### 2. 主な参加セッション&ツアー

#### 2.1 Keynote講演

第1日目のスピーカーは、Curtin University（オーストラリア）のTeresa Balsler教授でした。

まず、「現在我々が行っている教育システムは、もはや存在しない遠い過去にデザインされたものである。」と話し、教育の歴史や現在の高等教育における問題点、学生が身に着けるべきスキルの変遷などについて講演されました。

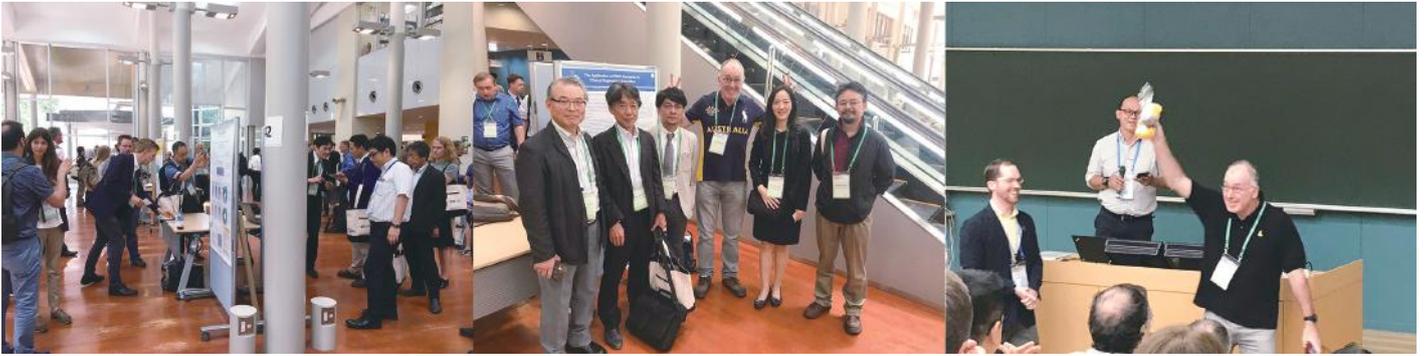
現在の学生は多様な人物が集団化されており、学習能力や意欲についてのレンジが広いと述べ、教育の困難さが強調されました。また、グローバル化やボーダーレス化は、あらゆる学生に届く教



Keynote講演の様子



CDIO Essentials I ワークショップの様子



ポスターセッションの様子

Natha先生と

表彰されるサイモン先生

育の実践を大学に課し、学生各々が持つ個性やペースに応じた対応が求められていると指摘しました。

学生に求められているスキルについては、現時点においては、複雑な問題についての解決能力、他者との協調、人材マネジメント能力、クリティカルシンキング、交渉能力などが挙げられますが、それは時代によって変遷し、もちろん将来大きく変わる可能性もあるとのことでした。

さらに、「大学教員の多くは教えるスキルについてのトレーニングを受けていない」とし、いわゆる古い講義形式からの脱却の必要性について論じました。

本講演を聴講し、本学の学生の状況についても再認識させられるとともに、自分自身の講義方法についていくつかの反省をするに至りました。

現在、私が主に教えている臨床工学専攻の学生については、学生時代の最終的な目標が臨床工学技士国家試験の合格にあります。そのため、講義内容は国家試験の内容や出題レベルを意識せざるを得ず、必要な知識を習得させるためにどうしても詰め込み式の教育形態になりがちです。実際に自分もそういった教育を受けてきました。

しかし、現在の多様な学生に対しては、例えば試験の点数で縛りながら目標を達成させるようなやり方では対応できず、あくまで自主・自律的に学ぶ姿

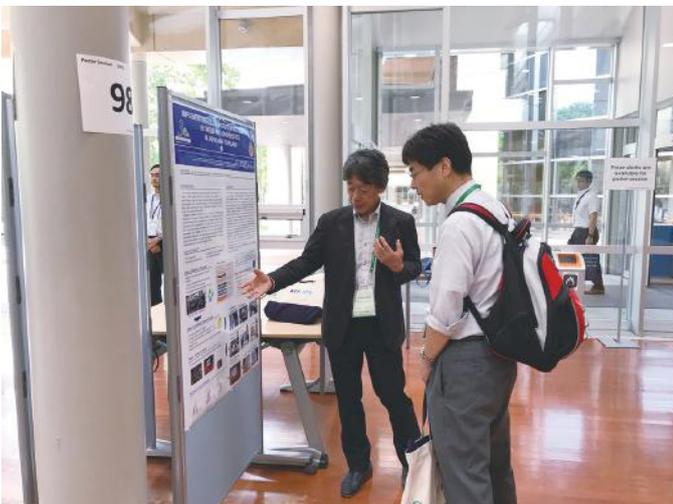
勢をどのように形成していくかといった段階から積み上げる必要があります。そのためには、まず教育する側がそれらの手法について検討し、教えるスキルを習得し、専攻全体の教育をデザインし適用することが重要であると学びました。

## 2.2 CDIO Essentials I

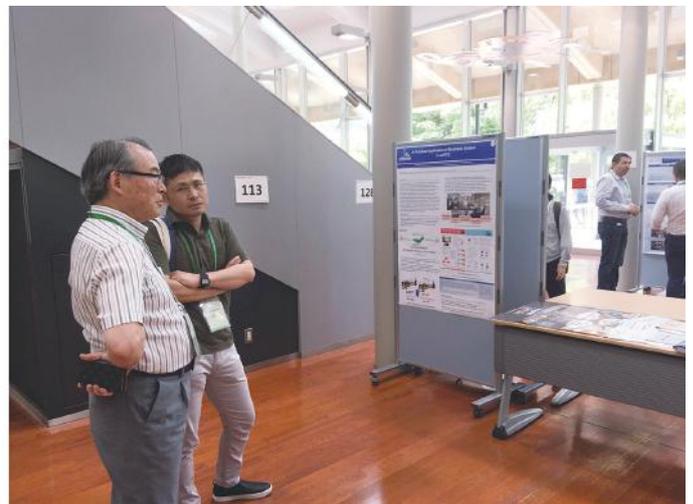
Chalmers University of Technology (スウェーデン) のJohan Malmqvist教授のワークショップに参加しました。タイトルは「Introduction to CDIO Education for The 21th Century」で、エンジニア教育についての今日的課題や現在までの歴史、CDIOの適用とアウトカム、教育プログラムの開発などについての教育的セッションでした。

このワークショップに参加することで、自分の中のひとつの疑問が解決しました。

それは、CDIO全体のフレームを、それぞれの専門的な教育にどのように落とし込めばよいのか、また成果をどのように評価すれば更に発展させることができるのか、という類のものでしたが、従前の自分は「工学教育」という前提に捉われ過ぎていたことに気がつきました。しかも、その「工学」というのは、他者との協調の中で創造的に何か築き上げる実践的技術を中心としたものをイメージしていたた



穴田先生のポスター発表



明神先生のポスター発表



学生プロジェクトの活動拠点「夢考房」

め、それを臨床工学教育にどのように適用するかについて若干の迷いを感じていました。

しかし、CDIOの方法論というのは、あくまでCDIO syllabus - CDIO standards - CDIO curriculum design process - CDIO standards self-evaluationを主軸とした自由度の高いものであり、全体を当てはめることがすべてではなく、専門領域や学内環境に応じて部分的に適用することも可能であることを学びました。

### 2.3 YUMEKOBO (夢考房) & Library Center Tour

二日目の午後に企画されていたキャンパスツアーに参加しました。

附属図書館や併設されているPMC (ポピュラー・ミュージック・コレクション) の規模や設備にも感銘を受けましたが、なにより素晴らしかったのは「夢考房 (www.kanazawa-it.ac.jp/yumekobo/index.html)」と名付けられた学生のワークスペース棟です。

ここでは、学生たちが様々なサポートを受けながら主体性をもってプロジェクトを形成し、実際にものづくりにチャレンジする力を養うことができます。もちろんたくさんの機器や道具、材料が揃っている先進的な空間でした。過去にはソーラーカーや人力飛行機、フォーミュラカーなどのプロジェクトを完

結し、その成果が誇らしげに展示されていました。

私がこの「夢考房」を見学させていただいて感じたことは、いかに自分が学生に対してつまらない教育をしていたのか、ということです。それは、「夢考房」で作業を進めていた学生たちの表情やディスカッションの様子から学びました。

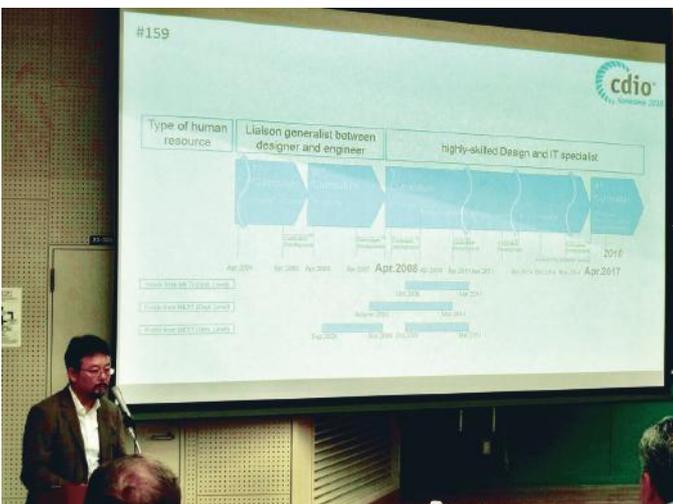
本学においても、これまで様々な素晴らしいプロジェクトが生まれ、運営する先生方の情熱と学生たちの努力で実績を重ねてきました。自分にも何かできるのだろうか、何かしたいと強く感じました。

### 3. まとめ

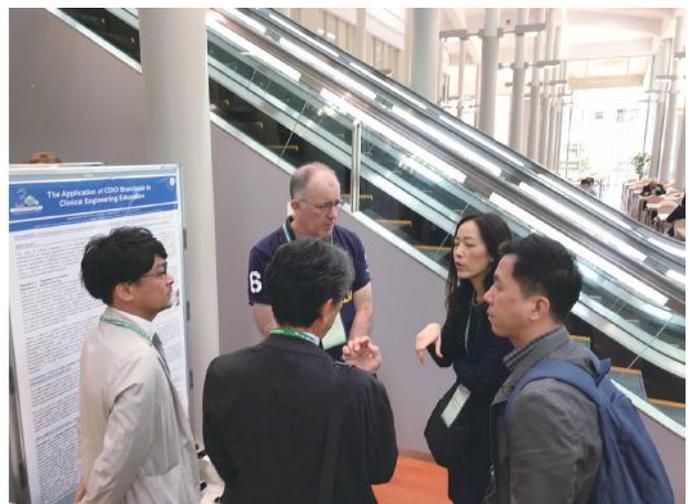
今回、日本で初めて開催されたCDIO2018に参加させていただき、現在そして今後の大学教育に求められる教育的フレームワークを学ぶことができました。

CDIOスタンダードにおいては、知識や技能の習得とともに、チームワークやコミュニケーションスキルの重要性が強調されており、それらは本学学生への教育・対応についても同様であると考えます。また、本学では既に多くの教育の場面でCDIOの概念が適用されているのではないかと確信しました。

今後、学科横断型プロジェクト教育などを通して、さらにアクティブな教育が展開されることを期待し、自分自身も今回の経験を活かしたいと考えています。



隼田先生のポスターテイザー発表



筆者のポスター発表

## CDIO Academyに参加して

情報メディア学部 情報メディア学科  
齋藤一ゼミ4年 中村翔太

### 1. CDIO Academyについて

2018年6月28日から7月2日までの間、金沢工業大学で第14回CDIO国際会議が開催されました。今回私は同学科3年の田中結衣さんと共に、同時に開催されていた第14回CDIO Academyに参加しました。

CDIOとは、Conceive（考え出す）、Design（設計する）、Implement（実行する）、Operate（操作する）の略で、工学教育改革のために作り出された考え方です。

CDIO Academyでは、世界中のCDIO加盟校の学生達が集い、CDIOの考え方を基に国際的なワークショップを行います。今回、日本からの参加校は、本学だけでした。2018年は「What kind of future will drones bring, and how will they affect our daily lives?」をテーマにワークショップを行い、8チームが各々の考えるシナリオに沿ったドローン用アームを製作しました。

今回のCDIO Academyは、事前課題としてのCDIO Academy Pre Assignment（以下PA）と金沢工大でのワークショップで構成されていました。

PAでは主にPERMA-TESTや情報収集を行い、課題として提出するよう指示されました。PERMA-TESTでは質問に対し10段階の段階形式で回答することにより、役職適性や性格が診断されました。後日、PERMA-TESTの診断結果によって、ロシア・マレーシア・タイ・中国の学生と共にワークショップに臨むことになりました。PERMA-TESTを受験後、現在のドローンの使用状況や倫理的・法的な問題について情報収集を行いました。またドローン用アームのメカニズムを考察し、プロトタイプを製作する指示も出されました。しかし製作に十分な知識・

資材がなく実行できませんでした。

金沢工大でのワークショップでは、各自が考えてきたアイデアを持ち寄って、メンバーと話し合って計画を立てます。その上で、4日間でドローンの下部に取り付けるアームを作ることが求められました。

### 2. 制作物

私のチームはシナリオ『建設現場で資材を運搬できるドローン』を想定して、外部動力を必要としないドローン用アームを製作しました。掴む物の重みでアームが閉まり、アームが接地したときにアームが開く仕組みです。

### 3. CDIO Academyに参加して

私は機械力学や航空力学などに関しては専門外でしたが、自分に出来ることでチームに貢献するためにシナリオ提案やプレゼン資料の制作をしていました。自分の知らない分野であっても活路を見出しつつ、積極的に取り組める姿勢を学べたと思います。もし今回のようなワークショップに参加する機会があれば是非また挑戦してみたいです。



全体講義



グループディスカッション



プレゼンテーション

1. はじめに

文部科学省の『「成長分野を支える情報技術人材育成拠点の形成」(enPiT)』は、複数の大学や産業界との全国的な協力により、最先端の情報技術を実用的に活用できる人材を育成するものである。昨年度の9名に続いて、本年度は10名がビジネスシステム設計分野（学部生のためのサービスデザインとPBL）に参加している。事前学習としてヒューマンインタフェースとWebプログラミング（PHP）超入門、さらにグループワークで必須のスキルであるファシリテーションを学ぶワークショップを体験後、はこだて未来大学でサービスデザイン・ワークショップのサマースクールに参加した。参加学生は、他大学の学生と協力しながら今夏のテーマ「函館移住の促進」について取り組んだ。その後、後期では各キャンパスのグループでテーマを定めPBLを実施している。本稿ではenPiTの紹介と、これまでの参加報告をする。

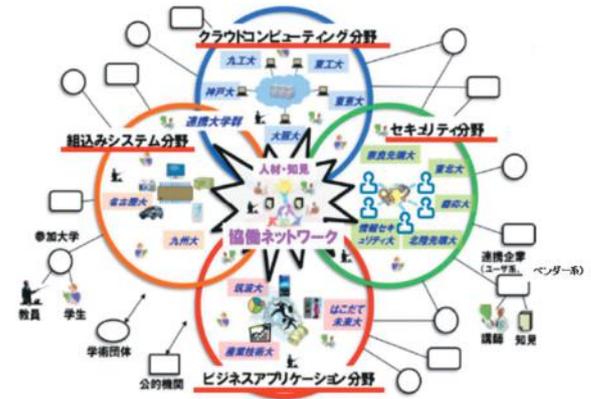


図1 4つの情報分野と連携

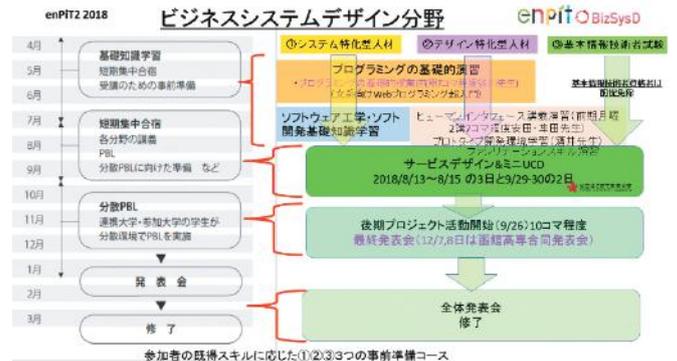


図2 教育プログラムのフレームワーク

2. enPiTとは

日本の複雑化した多くの問題を解決するためには、情報技術の高度利用が不可欠である。その適用を通じて社会の特定の問題を解決できる人材を育成するため、2012年度に「文部科学省の情報技術人材育成のための実践的な教育ネットワークを策定するプロジェクト」が開始された。このプロジェクトは、複数の大学および企業の全国ネットワークによる、実際の課題に基づいた問題解決型学習など実践的な教育の実施と普及を目的とした公募プロジェクトである。

公募の結果、「地域・分野を超えた実践的情報教育のための連携ネットワーク」（申請学校：大阪大学）が採択された。

enPiTにはクラウドコンピューティング、セキュリティ、組み込みシステム、ビジネスアプリケーションの4つの分野があり、主に大学院の修士課程の学生を対象にして、各分野の幅広い知識分野を教育するため、15の大学と企業が参加して開始された（図1）。

教育プログラムのフレームワークは図2に示すように各分野の協力大学や参加大学の講義や教材による基礎知識学習の後に短期集中のサマースクールで集中的な講義と実践的な形式の基本的なPBLを行う。その後、各大学のキャンパスの分散環境下で各フィールドのPBLによる実装後、結果を全体で発表するというものである。

2013年度305人の修士学生からスタートし、その後2016年度には496人の参加者を得て大きな飛躍を遂げた。4年間の合計で、1,742名の学生が修了した。15のコア大学に加えて、参加した大学は105に、支援企業は133に増加した。このような大学院

における成果を踏まえて学部生にも展開することとなり、2016年度に名称をenPiT2として「成長分野を支える情報技術人材育成拠点の形成」を開始した。学部3年4年生を対象とする実践的な情報技術教育プログラムである。準備期間を経て全国の30以上の大学の協力を得て2017年度から本格的な教育が始まった。大学院生向けのプログラム成果を活用し、「ビッグデータ・AI」、「セキュリティ」、「組み込みシステム」、「ビジネスシステムデザイン」の4つの分野で最先端技術の実践的な学習が開始された。PBLとともに、コミュニケーション能力やリーダーシップなどのソーシャルワーカーの基本的な力を習得するための教育となっている。本学が参加したビジネスシステムデザイン分野（BizSysDと呼ばれる）は、社会やビジネスのニーズに対する実践的なソリューションとして、独自のビジネスアプリケーションやシステム設計を提案し、開発し、顧客の潜在的な要求を自発的に解決できる革新的な人材を育成することを目指している。このプログラムは、ICTビジネスアプリケーション/システムを活用して、IoT時代のイノベーションに対応した人材育成を目的としている。

3. 本学の取組み

3.1. 2017年度

事前に、はこだて未来大学のプロジェクト学習成果発表会の視察や本学における事前学習科目の設定などの準備を行ったうえで、先端経営学科、システム情報学科、医療情報学科の各3名、情報メディア学科6名（計9名）が、7月以降12月までのenPiT2活動を実施した。

### (1) 基礎知識学習

事前学習として、プログラム未経験者のためのWebプログラミングの超入門科目として、PHPの基礎を7月21日から8月11日まで実施した（谷川先生）。また、7月7日から8月3日まで、スマートフォンの画面デザインを体験するためのヒューマンインタフェース講義とペーパープロトタイピングを行った（隼田・安田先生）。

### (2) 短期集中合宿

「サービスデザイン」サマーキャンプは、8月14日から18日まで5日間、はこだて未来大学で実施された。未来大学から14名、本学から9名、神奈川工科大から2名参加した（図3）。



図3 2017年度サマーキャンプ

初日は、アイデアやリーダーシップに関する講義とグループ演習を行った。2日目には、クックパッドでサービス開発を実践している未来大学卒業生から「不確実性に挑戦するサービス開発」の講義で、サービス開発、ビジネスモデル、ユーザーファーストなどの解説があった。その後、サービス開発の技術的側面とサービス開発の進め方をさらに理解するためにパネルディスカッションが行われた。

2日目の午後から4日目の朝まで、「2020年に函館観光収入を1.5倍にする」というテーマで新たな事業プランの策定を行った。具体的なアイデア作成、可視化、イノベーション考察、ビジネスモデルキャンバス、グループ演習やプレゼンテーションを実践した。4日目の午後、DCMホームマックから、ホームセンターの成長、事業戦略、企業の社会的責任について、「DCMホームマックの事業戦略」という講演を聞いた。5日目に、学生はサービスアイデアをとりまとめて、提案要約の方法とプレゼン法を学び、各チームがプレゼンテーションを行った。教員による評価の結果、カスタマイズ旅行を提案したチームが最優秀賞（ベストサービスデザイン賞）を受賞した。サマースクールを通して未来大学や参加大学の教員、企業の講師が学生チームの演習を支援した。

また、未来大学の講師が8月22日から24日の3日間、本学に出向いてユーザ中心設計（UCD）のワークショップを実施した。冒頭にSF映画（スタート

レック）を見た後、学生達は映画の世界観の中で人々が使いたいサービスやツールについてアイデアを出した。2日目には、このアイデアを実際の規模のプロトタイプとして実現し、評価しながら繰り返し修正した。3日目には、ポスターとプロトタイプを使ってプレゼンテーションを行い、プロトタイプを短いスキットで実演した。最後に、本学と未来大学の教員と学生の間で質疑セッションを行った。無意識のうちに入り込む制約を取り除いて「ぶっ飛んだ」興味深いアイデア作成に、このSFワークショップは適していることを実感した（図4）。



図4 UCDワークショップ

さらに、後期に実施の分散型PBL受講者の参加意識を高め、メンバーによるコラボレーションを成功させるファシリテーションスキルを学ぶ演習を行った。9月19日に本学で8名のenPiT参加者、5名の学生、8名の教員が参加し、外部講師を招いて実施した。会議の運営法や意見の引き出し方など実践的な学習であった。

### (3) 分散PBL

後期PBLは9月12日から毎週金曜日の6講にテレビ会議システムで未来大学と交信しながら11月末まで実施した。本学は2つのチームを構成した。

チームAは「大学における教室利用管理システム」（図5）、チームBは「人工知能で医療情報を検索し信頼性を判断するWebサービスの開発」（図6）であった。未来大学の教員や学生と意見交換しながら、学生はアイデアを出してプロトタイプを実装した。

プロトタイプ開発環境は、チームAは「PHPとCakePHP」、チームBは「HTML、CSS、Python」だった。

12月8日と9日には、未来大学で最終報告を行った。ポスターでプレゼンテーションを行った（図7）。

室蘭工科大学、岩手県立大学など、北海道東北地方での共同発表が9日に行われた。アイデア、技術、プロセス、成果物、ポスターの観点から評価し、本学の学生の評価は比較的良好であった。

北海道情報大学Aチーム  
**大学内の教室利用管理システム**  
 佐藤順風人 稲船愛望 阿部秀哉 菊地雄介

**概要**  
 既存の施設予約システム

**問題点**

- ・ユーザーインターフェースが古く、使いにくい。
- ・文字が小さく見えにくい。
- ・スマートフォンからだと使いにくい仕組み。
- ・特別教室などを予約するためには、事務局まで行かなければならない。
- ・学生はそもそも利用できない。

**提案システム**

- ・新しい使い勝手の良いUI
- ・施設の予約と交渉を可能にする
- ・学生も使用可能にする

**提案するアプリケーション**

**予約のルール**

- ✓ 二日前までに予約
- ✓ 優先度は 学生 < 教員 < 事務局
- ✓ 原則、授業やイベントが優先
- ✓ 三回連続で未使用時に、使用取り消しを行わなかった場合、予約システムを一週間停止

**予約システムの流れ**

ユーザー → 予約完了! → 事務局が承認

**今後の展望**

- ・交渉機能を作れなかったので実装させ、システムの改善を行うたい。
- ・要望として、これを機に学内のシステムを新しくしていきたい。

copyright 2017.12 北海道情報大学Aチーム

図5 チームA 教室利用管理

北海道情報大学 TeamB  
**人工知能による医療情報の検索と信用性の判断をしてくれるWebサービスの開発**  
 星川 龍 市川 聖哉 久保 内陸 高田 大樹 橋本 結希

**概要**

病名 → 治療法 → 医療情報 → ガイドライン → 結果のコメント

●背景  
 患者自身が疾病の調査をする場合、治療法などについてインターネットで検索すると様々な情報を得られる。反面、それらの情報には信頼性の低いものも多い。

●目的  
 SNS上のがんに関する情報の信頼度を数値で示し、それに対するコメントを返し、情報の判定や意思決定の過程を支援するシステムを開発したい。

**提案サービス**  
**HaiPercent**  
 がん治療支援サービス

国で推奨しているがんのガイドライン内のテキストを機械学習させ、ユーザーがSNS上からコピーしたテキストを貼付、貼付された内容がガイドラインとの程度一致しているかを判定し、その内容が信用できるものなのかのコメントも出力する。

**提案サービスの技術**

機械学習：データを学習させ、データに照らしたパターンや特徴を見出し、予測させる。

Doc2Vec：「深い」自然言語処理ライブラリを使用し、任意の長さの文章を、単語の集合体としてベクトル計算可能にする技術。

**プロトタイプ**

様々なサイトやSNS上からがんに関する情報を収集 → テキスト入力画面でその情報の内容を貼付する → その情報の信頼度がどのくらいなのかを数値で示す → 結果に対するコメントも表示され、意思決定を支援する。

図6 チームB 医療情報の信頼度評価



図7 最終報告会（はこだて未来大学）

この後、本学のメディアデザイン展（2月20日から25日）にも出展した。2月26日には修了式を行い、修了証を各学科教員から手渡した。他大学の学生と議論し、また発表することで、学生は自分たちの力を再認識できる良い機会となり、全員が自信をつけたようである。本学の学生もこのような全国的な取り組みに十分参加できることも確認できた。早い時期からの取り組みの必要性や、プロジェクトの進め方などに課題はみつかったが、これらを改善して、継続して取り組むこととした。

### 3.2. 2018年度

#### (1) 基礎知識学習

昨年度の反省から参加者を早めに募集して事前学習を前期の科目履修で行うことを考えたが結局6月の連休明けとなってしまい、昨年度と同じ特別講義とすることになった。今年度は昨年プロトタイプ開発で苦労したことから、早めに後期のチーム作りをしてテーマごとに適したプロトタイプ開発環境を選び、その利用法についての学習を追加した（酒井先生）。参加者は先端経営学科4名、医療情報学科1名（4年生）、情報メディア学科6名の3年生を中心とする計11名である。8月10日には昨年度1コマの講義中心であったファシリテーションスキル授業を2コマに拡大して行った。グループ討議参加者全員が身に着けるべきスキルであることを実感した。参加者は教員7名とenPiT参加学生10名であった。

#### (2) 短期集中合宿

はこだて未来大学での今年度のサマースクールは日立製作所の社会イノベーション協創センターから4名の講師を招き8月13日から15日の前期とプロトタイプを発表を行う後期の9月29、30日の二期に分けて実施した。テーマは函館への「移住をサポートするサービスデザイン」である。受講者は本学からの11名、神奈川工科大情報工学科の3名を含む未来大生を中心とする総勢47名の8チームである。

初日はサービスデザイン手法の解説と函館市移住サポートセンター長からの現状と課題の解説。その後、各チームで現状の課題を整理して、翌日の移住経験者へのインタビュー準備を行った（図8）。



図8 2018 サマースクール初日

2日目は五稜郭公園近くの函館コミュニティプラザで函館への移住経験者へのインタビューと各チームが取り上げる課題の決定と発表を行った（図9）。



図9 2018 サマースクール2日

3日目は未来大学に戻り、サービスアイデアを創出し、リーンキャンパスに整理した。これは、よりスタートアップ向けで、ビジネスモデルキャンパスより考えやすいからである。さらにステークホルダーの関係性把握のために「ビジネスオリガミ」を作成して発表した。このツールは日立オリジナルで関係者のWin-Win関係を創り出して可視化するのに優れている（図10）。

さらにカスタマージャーニーマップで移住希望者



図10 ビジネスオリガミ

の視点から課題をみつけて解決策を検討した。各チームのテーマは、「函館移住希望者向けシェアハウスサービス・マッチングアプリ」、「移住をサポートする逆求人サイト」、「イベントマッチング」、「函館移住支援コミュニティサイト」、「仕事と物件のマッチング」、「函館にいたい!」、「函館を日本イベントが起こる街にする、企画以外の開催代行サービス」、「地域コミュへ溶け込むきっかけづくりサービス」である。テーマを発表し、後半のプロトタイプ作成に向けて準備することとなった(図11)。



図11 サマースクール前半最終報告

サマースクール後半は9月29、28日の2日間、再度はこだて未来大学で実施された。初日にタッチポイントやサービスアイデアを洗練してプレゼンの準備を行い、2日目に最終プレゼンを行った。

リアリティの不足、ユーザ視点の掘下げ、アイデア不足、役割分担といった問題も散見されたが、短い時間にモックアップやプロトタイプ画面にまとめてアピールできた。アイデアの面白さとプレゼンの構成力からGチームの「函館を日本イベントが起こる街にする、企画以外の開催代行サービス」が最優秀賞を獲得した(図12)。



図12 サマースクール後半最終発表

### (3) 分散PBL

後期PBLは昨年度と同じく本学で9月から2チームを構成してテーマの探索から始めた。10月23日には昨年度参加の4年生にも参加してもらい後期PBLのキックオフを行った。テーマは、「近いトイレの場所と混雑状況を伝えるサービス」と「自治体ホームページ」について現在、12月7、8日の最終報告に向けてプロトタイプ作り最後の追込み中である。

## 4. enPiTの意義

enPiTは以下の点で大いに意義があると考えられる。

- ・学習の内容が時代の要請である社会の具体的な課

題を高度な情報技術を活用して取組めるという実践の情報技術教育であること。

- ・学生にとれば他大学の学生との他流試合は大きな刺激となり、自分の強みや弱みを自己発見する場となること。

- ・参加教員は多様な専門領域と教育手法を持つ教員相互の情報交換から、将来の課題解決のための連携ネットワークを形成できること。

特に、昨年度の参加学生たちは新たな経験と学び、共同開発を通して、他学部・他大学との交流、多様な人との意見交換から刺激を受けて大いに成長を実感したという感想を寄せている。

## 5. 今後の取組みと検討事項

本学からenPiTへは本報告の「ビジネスシステムデザイン分野」以外に北海道大学の「セキュリティ分野」にも参加者がいる。そのほかに「ビッグデータ・AI」、「組込みシステム」もあり各先生方には積極的に参加を検討いただきたい。また、来年度からの学科横断のプロジェクト講義である「プロジェクトトライアル」では各学科で取組んでいる優れた教育法を持ち寄ったPBL科目となるが、このenPiTの単位互換も考えてよい。さらに私のゼミではサービスデザインを取入れたデジタルビジネス開発方法論を扱っている。そこではシステムダイナミクスによるビジネスモデルの収益シミュレーションやデジタル技術がもたらす顧客価値の創出といったシーズ指向の視点も有する。これらの知見のenPiTへの提案も試行したい。

## 6. おわりに

本学のenPiT参加について金沢工業大学で今年6月に開催されたCDIO2018で「JAPANESE way of IT Professionals Development」として発表した。その際、ベトナムの大学教員とベトナムで教えているカナダ人が関心を持ってくれた。enPiTのようなプロジェクトの必要性がベトナムで高いということである。国内のenPiT関係者によるとenPiTに関する海外向けの発信はほとんどないということであった。

今後ともenPiTにおいて得られた知見はCDIOなどを通じて発信していきたい。

## 平成30年度 SD研修会の開催報告

通信教育部事務部長 木田 洋

### 「大学等におけるメンタルヘルスケアについて」

開催日時：平成30年9月10日（月）14:30～16:00

場 所：115教室

講 師：北海道産業保健総合支援センター  
産業保健相談員 山村 弘美氏

主に本学の教職員を対象として、「大学等におけるメンタルヘルスケアについて」というテーマでSD研修会を開催しました。講師として北海道産業保健総合支援センターの山村弘美氏（産業保健相談員）をお招きし、メンタル不調の早期発見・防止対策と休学者・退職者への支援・対応を中心に、メンタルに不調を感じている本人及び周りの方が気を付けるべきことや、他の教育機関での事例紹介などをご講演いただきました。

講演は次のような内容で行われました。

#### 【研修の目的】

職場のメンタルヘルスの基本的知識への理解と、メンタルヘルス不調者への気づきと対応について体験的に学ぶ

#### 【研修の内容】

##### 1. 働く人のストレスとメンタルヘルス

「仕事に関連したメンタルヘルス不調の増加」、「ストレッサーとストレス」、「ストレスと能率の関係」

「強いストレスが長く続くと・・・ → 強い苦痛や生活、仕事の支障が出現」

「メンタルヘルス不調の過程」、「うつ状態に見られる他覚所見」

##### 2. 職場のメンタルヘルス対策

「職場のメンタルヘルス対策の進め方」、「総合的なメンタルヘルスケアの取り組み」、「セルフケアの実践」

「感情は考え方に影響される」、「記憶されたストレス体験」、「睡眠は大切」

「5Sで職場ストレスを緩和する<整理・整頓・清掃・清潔・躰>」

「ストレスに効く栄養素と食材」、「NIOSHの職業性ストレスモデル」

「ラインケア（職場の管理監督者によるケア）」、「いつもと違う部下や同僚に関わる」

「いつもと違う様子に気づくことが大切」

##### 3. メンタルヘルス不調の早期発見と対応

「ラインによるケア」、「気配り」「気づき」「声かけ」「聴く」「つなぐ」、「職場復帰への支援」

「日常の信頼関係づくり」

普段何気なく見ている・感じていることが、メンタルヘルスにどのように影響しているのか、また、予防やケアの方法について学ぶことができ、大変有意義な研修となりました。

参加人数は、本学教職員及び専門学校職員併せて47名でした。



（SD研修会「大学等におけるメンタルヘルスケアについて」の講演の様子）

## FD・SD活動 行事实績と予定（平成30年度）

日 程	行 事
4月2日(月)	第1回新任教員研修会①-1
4月19日(木)	第1回新任教員研修会①-2
5月16日(水)～7月18日(水)	イングリッシュラウンジ（10回実施）
5月24日(木)～7月30日(月)	平成30年度 前期ピアレビュー実施期間
5月28日(月)～6月8日(金)	平成30年度 前期(前半)授業評価アンケートの実施
6月28日(木)～7月2日(月)	第14回CDIO国際会議（金沢工業大学）参加
7月6日(金)～7月9日(月)	TOEICチャレンジ600
7月14日(土)～7月27日(金)	平成30年度 前期(後半)授業評価アンケートの実施
8月13日(月)～8月15日(水) 9月29日(土)～9月30日(日)	enPiTサマースクール（公立はこだて未来大学）参加
9月4日(火)	ラジャマンガラ工科大学コンピュータ工学科Deachrut Jaithavil先生のプログラミング教育についての講演会
9月10日(月)	SD研修会（メンタルヘルスケア）
9月10日(月)	第1回新任教員研修会②-1
9月12日(水)	ラジャマンガラ工科大学にて、Deachrut Jaithavil先生の初級プログラミングの授業参観
9月27日(木)	第1回新任教員研修会②-2
10月1日(月)～12月21日(金)	平成30年度 後期ピアレビュー実施期間
10月17日(水)～12月19日(水)	イングリッシュラウンジ（10回実施）
10月25日(木)	第2回新任教員研修会、国際コラボレーション報告会
10月31日(水)(10月29日～11月2日)	第2回（2018年度）北海道情報大学イングリッシュデー実施
10月29日(月)～11月16日(金)	平成30年度 後期(前半)授業評価アンケートの実施
11月21日(水)	プロジェクトトライアルI チームビルディング（マシュマロチャレンジ）の授業参観
12月(日程未定)	TOEICチャレンジ600
12月～1月(日程未定)	イングリッシュフォーラム
1月7日(月)～1月29日(火)	平成30年度 後期（後半）授業評価アンケートの実施
1月11日(金)(予定)	CDIO2018報告会
3月(日程未定)	FD Tips Day（Rubricの使い方について）
3月1日(金)	2018年度北海道情報大学 FD・SD フォーラム
3月25日(月)～3月27日(水)(予定)	2019 CDIO Asian Regional Meeting参加

## FD委員会、小委員会等の活動実績（平成30年度）

委員会・WG名	月例ミーティング等日程
FD委員会	4/25(水)、5/23(水)、6/27(水)、7/6(金)、7/25(水)、9/25(火)、10/30(火)、11/27(火)
イベントの企画・実施小委員会	5/18(金)、6/11(月)、10/9(火)
ICT活用による教育イノベーション推進小委員会	5/21(月)、6/18(月)、8/9(木)、9/26(水)
新しい教育方法検討小委員会	5/16(水)、6/25(月)
学内英語化検討WG	10/10(水)
CDIOサブWG	8/2(木)、11/13(火)
enPiTサブWG	5/21(月)、10/23(火)
教育方法調査サブWG	11/12(月)

### 編集後記

胆振東部地震が起きた朝は名古屋にいた。「北海道全域が停電」というNHKニュースに、「これは大変なことになった」と思った。飛行機は全便欠航。ようやく振替便を確保して一息ついた時、「地震が授業中だったら、自分は教室内での確に行動できただろうか」と思った。災害は突然起こる。いざという時に正しく行動するには訓練が必要なことはいうまでもない。教育の向上のためにも、やはり訓練が必要である。それがFDなのだと思う。

経営情報学部 先端経営学科 准教授 福沢 康弘